

万葉の川心

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

河内の大橋を独り去く娘子を見る歌

(巻第九 一七四二番歌)

級照る 片足羽川の さ丹塗の 大橋の上ゆ
 紅の 赤裳裾引き 山藍もち 摺れる衣着て
 ただ独り い渡らす児は 若草の 夫かあるらむ
 榎の実の 独りか寝らむ 問はまくの
 欲しき我妹が 家の知らなく

朱に塗られた橋の上を、見目麗しい女人が独り静かにそこにいる。声をかけようか・・・と思ひ、なぜそんなことを思ったのかという自分に戸惑う。「うらがなしい」という古い言葉が浮かぶ。本当に「悲しい」というのではなく、それは胸がつまるような愛おしさに近い。なんだか、心惹かれるのである。一目惚れというのにもびつたりこない。ただ独り行くその姿を止めたくなく。「若草の夫」がいるのだろうか。それとも、どんぐりのひとつ転がる実のように、独り寝をする君なのか。なぜこんなに気になるのかも分からない。どこの誰とも知らない君なのに。

「榎の実の」というところが、なんだか面白い。恋愛に突然「どんぐり」が登場してくると、かわいらしいような、懐かしいような気がする。でも確かに、栗の実のようにがっしりと寄せ集まった家族でなく、ひとつコロコロと転がっていると、思わず拾いたくなる愛しいものがどんぐりなのである。

犬養孝著『万葉の旅(中)』(1964 社会思想社)によると、「難波への



要路」となる「山峡がうちひらけた河内野の一体は、古墳をはじめ古代文化の遺跡に富み、帰化漢人らの中心勢力地として、河内文化の花のひらいたところである。(中略)してみれば、この辺の川に、先進の技術をかりた朱塗の大橋がかかっている、ふしぎではない。」という。山の緑に包まれたなにか美しい川が流れ、朱の大橋の上には赤の裳裾を引いて、藍緑色に摺った衣を着た唐風の装いの人が、ただひとり渡っている。歌にして、風景画が目の前に広がり、胸がつまるほどの愛しさが、通りすがりのその人にあふれ出るのである。それなのに、歌を詠んだ高橋虫麻呂は、「自分の恋歌を一首も残していない」という。きつとこの歌のときも、本当に声をかけてはいない。いや、実際にそんな女性すらいなかったかもしれない。言葉という絵の具を使って、自分の世界観や情景を巧みに描いていくかっこよさを今ならば何と表現しようか。「粹」というのか、「クール」というのか。反歌では、橋のたもとに自分の家があったならば、あの子に一夜の宿を貸したいものだと言っている。家があるが無かるうが、「ええかっこしい」してないで、早いとこ声をかけんか!と言う方もいるかもしれない。いやいや、美しい人には声をかけず、遠くから見ているのが良いとする方がいるかもしれない。万葉の人々は、この歌をどう感じたろうか。あの頃と時代は大きく変わったけれど、川が今もそこに流れるように、人の思いはそんなに遠く離れてはいない。万葉集を読むたびにそう思うのである。

川があれば橋がある。橋があれば出会いがある。橋の上の小さなドラマは、いつかあなたにも訪れるかもしれませぬ。今日は、他人としてすれ違ったとしても・・・